

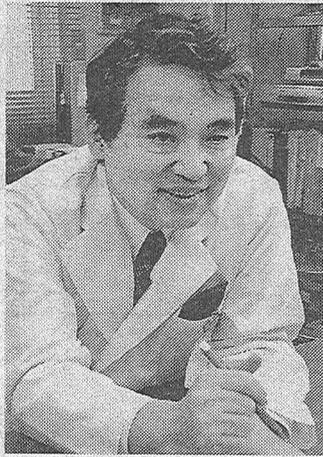
現地と連携 巡回診療

四川大地震から1週間

医療支援のAMDA

中国・四川大地震の発生から1週目を迎えた19日、被災地で緊急医療支援を実施しているAMDAグループ（岡山市）の菅波代表が毎日新聞の取材に応じ、「素早く現地に入れたことが良かった。これまで培ってきた人脈が生きたと思う」などと現地での活動を語った。

菅波代表が語る



四川大地震の緊急支援について語る菅波代表

AMDA本部で

菅波代表によると、AMDAは雲南省大地震（96年）や四川省の雪害（同）での連携を生かし、現地の医師、看護師ら4人が被災地

入りし、体育館などで診療にあたってている。AMDA台湾支部には中国で病院を運営する医師もおり、上海など

の医師と連携し15日前

「私たちは見捨てていない」 被災地の要望を最重視

四川大地震で被災地への募金を呼びかける中国人留学生たち
—岡山大で



被災者の支援訴え

中国人留学生 岡山大で募金活動

後のチームで巡回診療を行っている。さらにカナダ在住の中国系医師や香港の小児科医、上海の医療スタッフも待機し、要望に応じて現地入りを検討しているという。また、本部職員も台湾チームと合流している。「現地ではダムが決壊するという情報が流れて、（被災地から）退去するように言われた

り、既に医療スタッフがいる村に行ったりと、正確な情報が入っていない」という。菅波代表は「災害時に大切なのは現地の要望。皆が現地入りすればいいというものではない。現地の判断が一番大事だ」と話し、「救済活動で重要なのは、真っ先に『私たちは見捨てていない』とメッセージを送ること。これは岡山にいてもできる。留学生に声をかけたり、姉妹都市提携を結んでいたら、市長や議員が率先して『必要なことがあれば声をかけてくれ』と声を上げてほしい」と訴えた。

また、この日はカード利用金額の一部をAMDAに寄付する表は「ベストのタイミングでいただいた。発行している全日信急支援に役立てたい」を寄付した。菅波代表と語った。

一方、岡山市津島中1の岡山大に通う中国人留学生ら約10人が19日、同大の食堂前で被災地に贈る募金活動を行った。留学生団体「岡山県中国人留學生学生会」が県内の各大学に呼びかけた。岡山大には現在396人の中国人留學生が在籍し、全留學生の約65%を占める。正午から約1時間、募金箱を抱えながら「募金をお願いします」と留學生が呼びかけると、昼食で集まった学生らが次々と募金に応じた。また、大地震で200人以上の死者が確認されている四川省広元市出身で教育学部研究生の張莉さん（24）

は「家族や友人は無事だったけど、自分が通った青川県の中学校は崩壊した。時間が許す限り募金活動を続けた」と力を込めた。法学部4年生の板東孝法さんは「テレビで被災者の姿を見て大変だなと感じていた。募金なら岡山からでも役立てる」と話した。募金は中国総領事館（大阪市）を通じて「中国教育発展基金会」に全額贈られ、大地震で被害が深刻な小中学校の校舎再建などに充てられるという。募金活動は23日まで。岡山大、岡山理科大、山陽女子短大などで行われる。【松井豊】